

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伐	バツ うつきる ほこる 常①								法華義疏
伏	フク ふす ふせる したがう 常①								王勃詩序
位	イ くらい 教4 常①								聖武天皇雜集
何	カ なに なん いずれ 教2 常①								王勃詩序
									風信帖
伽	カ き とぎ 人①								豐替指歸
佐	サ すけ たすける 常①								聖武天皇雜集
									趙志集
作	サク サ つくる なす 教2 常①								王勃詩序
									空海 金剛般若經開題
伺	シ うかがう 常①								王勃詩序

【位】 金文、古璽の字体は「立」だけでニンベンがない。  
 【佐】 説文にないためか干祿字書、五經文字、九經字樣、開成石經のいずれにも見えない。「工」が「匕」になる異体字は中国の南北朝の頃から。  
 【作】 甲骨ではニンベンがない。漱石は草書の字体も使う。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元暦萬葉①	節用	人4										現代中国
元暦萬葉①	節用	人4										現代中国
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
日本紀遠望和歌	節用	人5										現代中国
元暦萬葉①	節用	人5										北宋・蔡京 現代中国
元暦萬葉①	本佐録											現代中国
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
尼崎萬葉①	節用											
雲紙本朗詠	節用											
元暦萬葉②	出世太平記	人5										現代中国

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
似	シ にる								王勃詩序
住	ジュウ すまう すむ とどまる								法隆寺観物帳
伸	シンの のばす のびる のべる								五経・序
体	タイ てい からだ								
體	②								聖武天皇雜集
體	②								法華義疏
體									聖賢指歸
躰	②								法華義疏
但	タン ただし								瑠玉集
佃	デン つくだ								

【似】説文では「目」に「人」がついた字体。そもそも「以」は「目」に「人」がついた字だとしたら釈然としない。古代の字体は「口」が加わっていたものもある。  
【体】正(統)字体は「體」だが、隸書には「體」もあり、偏をニクヅキにしたものもある。草書は「體」をくずした字体だ

とおもう。干祿字書は「體」を〈俗〉としている。旁を「本」とする字体は、遅くとも唐代から現れる。太宰治が通(用)字体の「体」を書いている。  
【但】漢代から右下の横線がナベブタ状になっている異体字あり。「国定教科書に於ける正字俗字一覧表」で異字としてい

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
似	似	似	似	似			似	似	似	似	似	似
元暦萬葉①	高札之写	人5										現代中国
	節用											
住	住	住	住	住			住	住	住	住	住	住
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
伸	伸	伸	伸	伸			伸	伸	伸	伸	伸	伸
		人5										現代中国
体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体
藤原政理詩體紙	五常俗談集	人5										現代中国
體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體
元暦萬葉⑥	節用	骨13										現代中国
體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體
元暦萬葉⑦	節用	身13										現代中国
躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰
		骨5										現代中国
躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰
元暦萬葉②	五常俗談集	身5										現代中国
但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但
元暦萬葉①	本願念仏利益章	人5										現代中国
但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但
元暦萬葉①												
佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃
元暦萬葉⑩	節用	人5										現代中国

る字体を漱石が書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
低	テイ ひくい ひくまる ひくめる 教4 常①		𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伯	ハク おさ 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伴	ハン バン ともなう とも 常①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
佑	ユウ たすける 人①				𠄎				
余	ヨ あます あまる われ 教5 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
餘	②		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伶	レイ 人①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
依	イエ 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

【低】説文の原本にはなかつたらしく、大徐本に新附字として掲載されている。唐代正字もない。旁が「互」の字体もある。ちなみに干祿字書では「互」の字体を「𠄎」とする。隸書に旁が「𠄎」に似た字体のものがある。現代中国では最終画は横線ではなく点。

【伯】西周まではニンベンがなく「白」だけ。  
 【佑】説文不録。平安中期の桂宮本万葉、江戸期の大日本永代節用無尽蔵、ともに傍の「右」は、横線を先に書いている。  
 【余】「余」と「餘」は本来は別の字だが通用する。漱石が両方の字体を書いているのには驚いた。使用例は「持て余してい

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
低	低	低	低	低			低	低	低	低	低	低
伯	伯	伯	伯				伯	伯		伯		伯
伴	伴	伴	伴				伴	伴	伴	伴		伴
佑	佑	佑	佑				佑					佑
余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余
餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘
伶	伶	伶	伶									伶
依	依	依	依	依	依		依	依	依	依		依

る」、「餘り気の毒だから」、「汽車が余っ程動き出して」、「学資の餘りを」、「余っ程上等だ」、「余計な手数だ」、「余計な減らず口」、「年中持て余して」、「餘り上品ぢやないが」、「餘っ程えらく」、「余っ程辛防強い」、「蚊が餘っ程刺した」、「余計な発議」……さて漱石に使い分けの基準はあるのだろうか。

【依】大徐本と段注本の字体が異なる。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
侍	シ さむらい はべる		侍	侍	侍	侍	侍	侍	侍
俣	フ あなどる		俣	俣	俣	俣	俣	俣	俣
併	ヘイ あわせる しかし ならぶ		併	併	併	併	併	併	併
俣	ジン まま		俣	俣	俣	俣	俣	俣	俣
例	レイ たとえる たとえ		例	例	例	例	例	例	例
俄	ガ にわか		俄	俄	俄	俄	俄	俄	俄
係	ケイ かか かか かか つなぐ		係	係	係	係	係	係	係
侯	コウ きみ これ		侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
俣			俣	俣	俣	俣	俣	俣	俣

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
侍	侍	侍	侍				侍	侍		侍		侍
	俣	俣	俣	俣			俣	俣	俣	俣		俣
		俣										
併	併	併	併	併	併		併	併		併		併
	俣											
				俣	俣	俣						俣
例	例	例	例	例	例		例	例	例	例	例	例
俄	俄	俄	俄	俄	俄		俄					俄
係	係	係	係	係	係		係	係	係	係	係	係
侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
俣	俣	俣	俣	俣	俣							

【侍】江戸版本では草書が多く使われ、行書は少ない。  
 【併】4種類の正字の字体がそれぞれ違う。  
 【係】傍の一面目が略されることあり。節用と弘道軒は傍の一面目を左から右に書いている。  
 【俣】古代の字は「尸+矢」で「尸」は後に加わる。「尸」の

左ハライと「尸」の縦線が合わさってニンベンになる。「俣」が正(統)字体、「俣」の「矢」が「夫」になった字体が通(用)字体。『陸軍幼年学校用字便覧』では「俣」を〈本字〉としている。弘道軒四号には「俣」がみつからない。弘道軒三号には「俣」がある。弘道軒2は異体字だろうか？

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俊	シュン すぐれる 常①		倝	倝	倝	倝	倝	倝	王勃詩序
倂			倂	倂	倂	倂	倂	倂	
信	シンのばすのびるまかせるまこと 教4 常①	信 信 信	信	信	信	信	信	信	王勃詩序
		信 信 信	信	信	信	信	信	信	
侵	シン おかす 常①	侵 侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	聖武天皇雜集
		侵 侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	
倂	ソク うながす せまる 常①		倂	倂	倂	倂	倂	倂	王勃詩序
俗	ソク ならわし 常①	俗 俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	法華義疏
		俗 俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	
便	ベン ピン たよ り す な わ ち 教4 常①	便 便 便	便	便	便	便	便	便	王勃詩序
保	ホ ホウ たも つ やす ん じ る 教5 常①	保 保 保	保	保	保	保	保	保	鄭書指歸
		保 保 保	保	保	保	保	保	保	
		保 保 保	保	保	保	保	保	保	

【俊】五経文字では「俊」と「倂」は異体字。康熙字典では「俊」と「倂」は別に掲載されているが、「倂」の説明に「同俊」とある。「倂」は大徐には見えない。「俊」は干禄字書には見えない。  
 【信】 傍の「言」はもともと「辛+口」の形で、「辛」は略されて「立」になる。すると「信」は「倍」と字体が衝突する。それで漢代に字体を変更したのだろう。  
 【侵】 干禄字書と五経文字の正字体は同じ字体。大徐本の字体の傍は「帯+又」なのだが正(統)字体楷書でも「巾」を略している。「又」を「丈」に書く例も多い。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
俊	俊	俊	俊				俊	俊		俊		俊 現代中国
		倂								倂		倂 干禄(通) 干禄(正)
信	信	信	信	信			信	信	信	信		信 現代中国
		倂										
		倂										
侵	侵	侵	侵				侵	侵		侵		侵 江戸干禄(俗) 現代中国
		倂										
倂	倂	倂	倂	倂			倂	倂		倂		倂 現代中国
俗	俗	俗	俗	俗			俗	俗	俗	俗		俗 現代中国
		倂										
便	便	便	便	便			便	便	便	便	便	便 夏目漱石 現代中国
保	保	保	保	保			保	保	保	保		保 現代中国
		倂										
		倂										

【俗】「谷」の上部はもともと「ハ」が2つ重なったような形。北朝時代には下の「ハ」がヒトヤネまたは横線のような形になる。漱石は草書を書いている。  
 【保】「人」と「子」に関係する字とおもわれる。甲骨文字の形を明朝体にすれば「仔」となる。金文では「子」のおしりか足のあたりに「ノ」状の曲線がある。これが「子」の左右に配されるようになったのであって、傍は「口+木」ではなく、「子+ハ」。そもそもカタカナ「ホ」の元字だから、教育漢字のように「木」を書くのはおかしい。